

城下町高田における歴史的建造物の残存状況および外観特性

－旧町人町地区を対象として－

Remaining Condition and Characteristic of Historic Buildings in TAKADA Castle Town
-A Case of old Merchant District-

○竹市昌平^{*1}

小林由佳^{*2}

岡崎篤行^{*3}

Syouhei TAKEICHI

Yuka KOBAYASHI

Atsuyuki OKAZAKI

本研究は新潟県上越市高田の旧町人町地区において歴史的建造物の残存状況と外観特性を明らかにすることを目的とし、対象地内において歴史的建造物の抽出と外観の悉皆調査・分析を行った。調査範囲内において歴史的建造物 633 棟を推定し、全建造物に対する割合(歴建率)は 15% であった。高田の『伝統的町屋』は奥行きの長い横屋の平入りで、県内他地域では優勢な豊屋や、丁字造りは見られなかった。またそれらを外観形態によって 9 つのタイプに分類を行った。

Keywords TAKADA, Castle Town, Merchant District, Historic Buildings
高田, 城下町, 町人町, 歴史的建造物

1. 研究の背景と目的

上越市高田は、新潟県南西部に位置する上越地方の中心都市である。江戸時代には越後最大の城下町として栄え、現在でも近世の町割が残り、雁木通りは日本一の長さを誇ると言われている。上越市では現在、高田市街地活性化への取り組みとして、旧町人町地区を中心にこの地域の特色である雁木や町屋などの歴史的建造物を活かしたまちづくりを専門家や市民らと連携しながら進めている。これまで上越市による歴史的建造物の現況調査^{①②} や雁木^③や町屋^④、景観^⑤についての学術的な調査・研究がなされているが、今後さらに具体的な景観整備を行っていく上では、より網羅的かつ詳細な外観調査が必要である。また、本研究は新潟県内の町場における町並みの地域特性を把握する研究^⑥の一端を担うものであり、同様の指標による調査データを必要とする。

のことから本研究では、高田の旧町人町において歴史的建造物の残存状況と外観特性を明らかにすることを目的とする。

2. 対象地概要と研究方法

城下町高田は慶長 19(1614) 年松平忠輝によって築城された高田城を中心に新設された城下町であり、松平光長の時代(1624~1681 年)に現在の形に整備されたと言われている。現在も城郭・家中屋敷地・町人町・寺町という近世城下町特有の身分制に基づく町割が残っており、また街道を引き入れ、町人町を郭外に配置していることから、軍事面だけでなく交通の便宜を図り、商業活動をも重視した都市計画がなされていたと言える。調査対象地は幕末期の町人町地区の範囲を基本とし、城下の入口であった番所跡までの範囲とする。調査結果の集計には、旧町割を用いると町の数が非常に多くなるため現町丁割を用いることとする。旧町割は現町丁割よりも小さいものとなっている。外観調査では、始めに目視及びヒアリングから歴史的建造物⁽¹⁾の抽出を行い、次に抽出されたものについて外観から用途・様式・配置・形態・意匠などの項目について調査を行う。そしてその結果から歴史的建造物の類型と特性を分析・考察する。

*1 新潟大学大学院自然科学研究科 博士前期課程 Grad. Student, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ

*2 積水ハウス株式会社 Sekisui House,Ltd

*3 新潟大学工学部建設学科 准教授・博士(工学) Assoc.Prof.,Dept.of Civil and Architecture,Faculty of Eng,Niigata Univ.,Dr.Eng.

3. 歴史的建造物の残存状況

旧町人町(現 27 町丁)地区において、確認できた建造物総数 4184 棟のうち、主屋 525 棟、そのほか土蔵や寺社など 108 棟を含む 633 棟を歴史的建造物であると推定した。なお本研究における全建造物数は現地にて住宅地図を用い、目視により確認できた建造物の棟数である。[図 1]

調査範囲全体の歴建率⁽²⁾は 15% であった⁽³⁾。県内の城下町で既往研究により残存状況が明らかな村上⁽⁶⁾・新発田⁽⁷⁾と比較すると [図 2]、歴建率では及ばないものの、歴史的建造物の棟数は最も多く、町の規模が大きいことが特徴である。

町丁別歴建率では本町 2 丁目が最も高く 30%、次いで仲町 5 丁目が 29% である。地区別では本町と大町が 20% で最も高くなっている [図 3]。本町 3~5 丁目は商店街の近代化事業により歴史的建造物はほとんど残っていないため、これらの町丁を除く本町の歴建率は 27% 近くとなる。主要街路(旧街道・裏通り)⁽³⁾沿いにおいて見ると、南本町 2 丁目から本町 2 丁目の街道沿いにかけてと、本町 6・7 丁目と隣接する仲町・大町 5 丁目、東本町・北本町 1 丁目の一帯が連続して 30~40% 前後の高い歴建率を示している [図 1]。これらの地区には登録文化財の

高橋あめやや、町屋交流館高田小町、公開町屋の旧今井染物屋などが立地していることから、町並み保全整備において中核となる重要な地区であると考える。

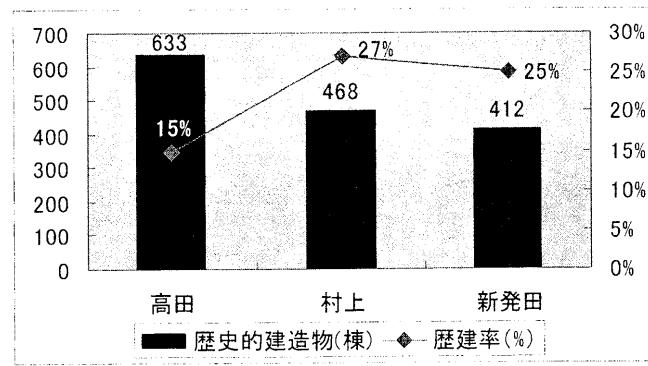


図 2 高田・村上・新発田の歴史的建造物の残存数と歴建率

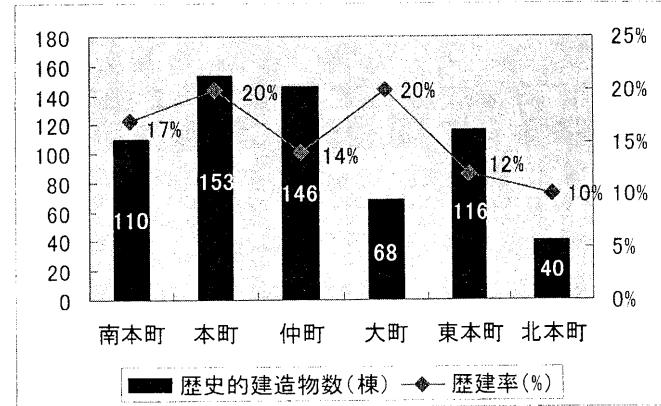


図 3 歴史的建造物の町別棟数と歴建率

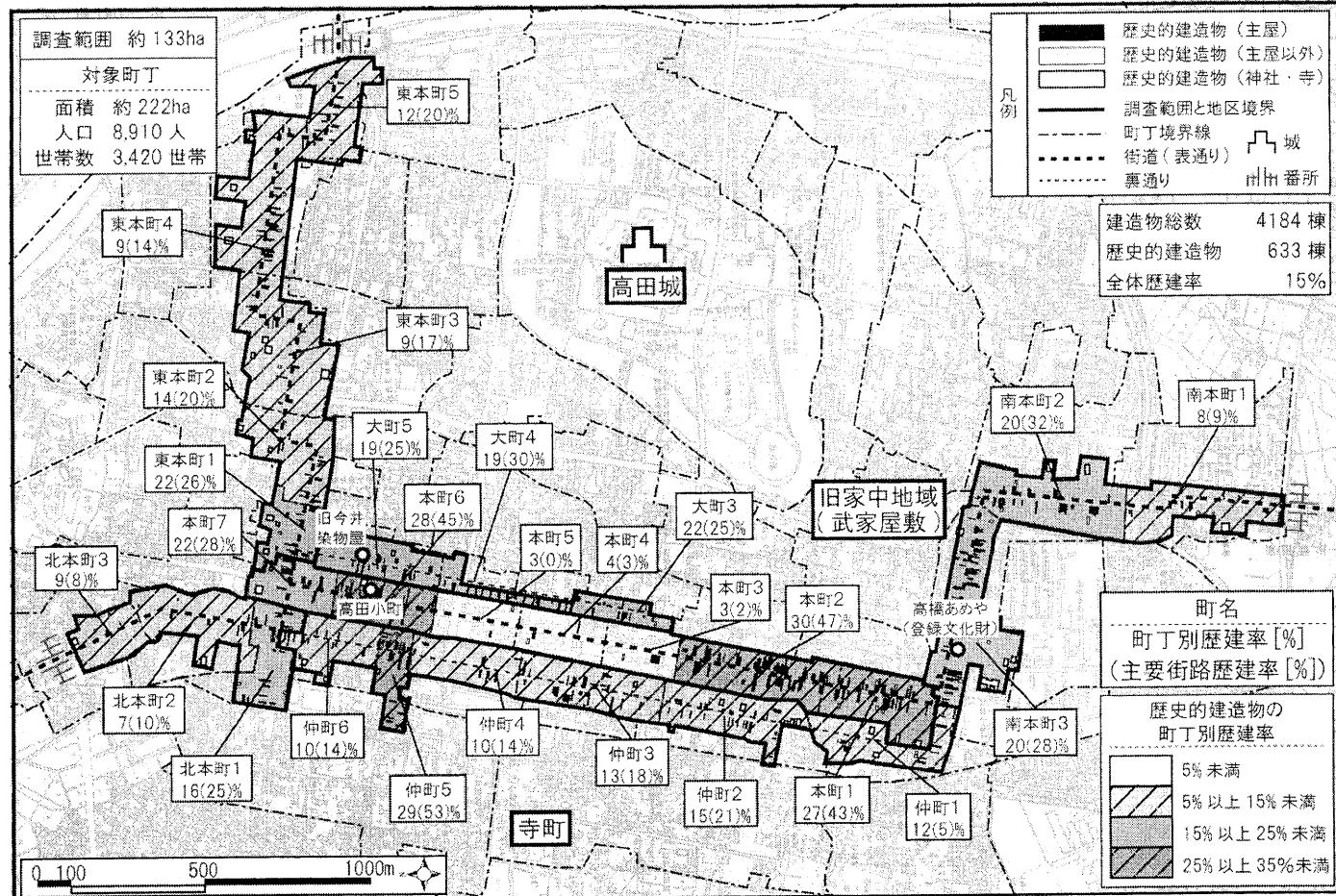


図 1 歴史的建造物の残存状況と分布図

4. 歴史的建造物の外観特性および地区特性

4-1. 歴史的建造物の分類

歴史的建造物を用途・様式・配置形態において分類し、最も多かった戸建・伝統和風・町屋系配置に分類された510棟を高田の『伝統的町屋』として抽出した[図4]。これらは前面道路に対して棟が平行な横屋の平入りで、間口が狭く奥行きが長い外形である。新潟県内では優勢的な堅屋や、丁字造り⁸⁾は見られず、村上や佐渡などの一部の地域とのみ共通していることが特徴である。また、『伝統的町屋』以外に特徴的なものとして、明治後期頃から取り入れられた洋風建築が公共的建築や一部の住居・店舗において見られる[図5][図6]。

4-2. 『伝統的町屋』の外観形態による分類

高田の『伝統的町屋』を外観形態(外形・棟向き・階数・2階形態・1階形態)から分類を行ったところ、主要な9つのタイプに分類できた(表1)[図7]。同じ横屋でありながらその外観は多様であると言える。

最も多いタイプは「2階建・落とし式雁木」であり、町人町全体で見られるが、本町での割合が他地区に比べ高くなっている。次いで多く見られるのが「屋根分離型出窓式雁木」であり、大町や東本町など北部での割合が高く、せがい造のものが多いことが特徴である。そのほか、軒高の低いA~Dまでのタイプは仲町や南本町、東本町などの周縁部に立地し、通りではなく小路に立地する割合が高い。これらは明治期に落とし雁木が普及する以前の形式³⁾と考えられている。

また、出窓式雁木のタイプは大正時代に流行したもの³⁾

表1 『伝統的町屋』の外観形態による分類

分類番号	A	B	C	D	E	F	G	H	I
タイプ名	平屋建 差し掛け式 雁木	平屋建 屋根連続式 雁木	2階建 屋根連続式 雁木	2階建 造り込み式 雁木	2階建 落とし式 雁木	一体型 出窓式 雁木	雁木分離型 出窓式 雁木	屋根分離型 出窓式 雁木	独立型 出窓式 雁木
棟数・割合	6棟 1.2%	10棟 2.0%	7棟 1.4%	32棟 6.3%	190棟 37%	62棟 12%	8棟 1.7%	127棟 25%	45棟 8.8%
外観バース									
写真									
優勢街路 ⁽⁴⁾	小路	裏通り	街道・裏通り	小路	全体	街道	裏通り	街道・裏通り	全体
優勢2階高 ⁽⁵⁾			つし	つし	低	低	低	中	中
天窓有り	33%	50%	43%	53%	47%	50%	50%	27%	31%
軒下の特徴(棟)	登梁(2)	—	登梁(2)	登梁(1)	登梁出桁(58)	登梁出桁(17)	登梁(3)	せがい造(20)	登梁出桁(10)
優勢年代 ⁽⁶⁾	江戸～明治				明治			昭和(戦前)	

と言われているが、「一体型」と「雁木分離型」は「屋根分離式」や「独立式」に比べ軒高が低めで、採取できた建築年代⁽⁵⁾では明治期のものが多く見られる。

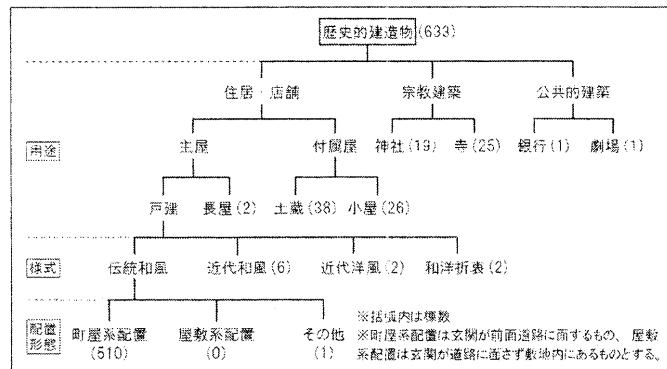


図4 歴史的建造物の分類



図5 洋風の住居・店舗

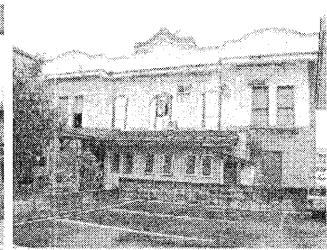


図6 明治創立の劇場

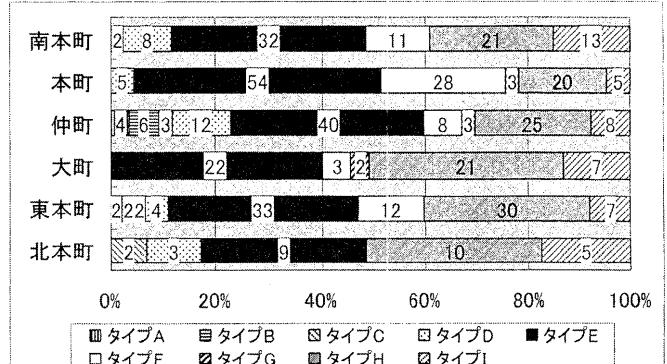


図7 『伝統的町屋』のタイプと地区との関係

5. 細部意匠に見られる特徴

細部意匠において特徴的に見られたものは、ガラス雨戸 24 棟、窓付き雨戸 7 棟、戸袋 45 棟、1 階格子 12 棟、2 階格子 9 棟、袖壁 12 棟などである。

ガラス雨戸 [図 8] や窓付き雨戸 [図 9] は新潟県内の町場において特徴的に見られるものであり、高田ではガラス戸が多いことが特徴である。戸袋と対をなすものであるが、引き違い戸へと改修され、戸袋のみが残る場合も見られている。戸袋は木製やトタンのものが多く見られたが、雨戸と同様ガラスのものも見られた。

格子においては、1 階に付くものが 2 階のものより若干多く見られた。地区では大町に多く見られるのが特徴である。近代以降の新建材の普及に伴い、1 階前面は格子戸からガラス戸へ変化した¹⁾と言われている。

袖壁 [図 10] は登梁の先に桁をのせ軒を長くした構造（本研究では登梁出桁と呼ぶこととする）[図 11] の町屋に付いており、街道沿いの町屋にのみ見られた。これは堅屋が優勢な新潟県内では珍しい形式であると考えられ、富山や石川などの北陸地方の町屋と共通している。

また、棟数は少ないが雁木上で出窓を支える束に意匠的な形をしたもののが 2 棟見られた。名称については判明しなかったが、このような部材に意匠を凝らしたもののは珍しいと考えられる [図 12]。

6. 結論

(1)既往研究において残存状況が明らかになっている県内の城下町である村上・新発田と比較すると、全体の歴建率は及ばないものの、町屋をはじめとした歴史的建造物の棟数は最も多く、重要な町である。

(2)南本町 2 丁目から本町 2 丁目の街道沿いと、本町 6 丁目及びその周辺の町丁を含む一帯の 2 地区は、主要街路において連続・一体となって町並みを構成している中で歴建率が高く、重要な歴史的建造物も立地していることから、町並み整備において的重要地区であると考える。

(3)高田の『伝統的町屋』は前面道路に対して横屋の平入りで、堅屋や丁字造りは見られなかった。また、外観の形態によって主要な 9 つのタイプに分類でき、同じ横屋でありながら、その外観は多様であると言える。タイプは立地する地区、階高、年代等に特徴が見られた。

(4)細部意匠ではガラス雨戸や窓付き雨戸、格子などのほか、新潟県内では珍しい登梁で袖壁の付いた町屋や、出窓を支える束に意匠的な形のものが見られる。



図 8 ガラス戸・ガラス戸袋

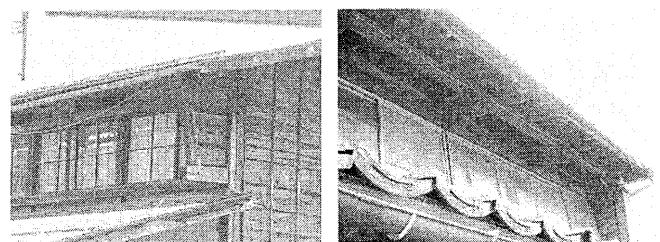


図 9 窓付き戸

図 10 袖壁

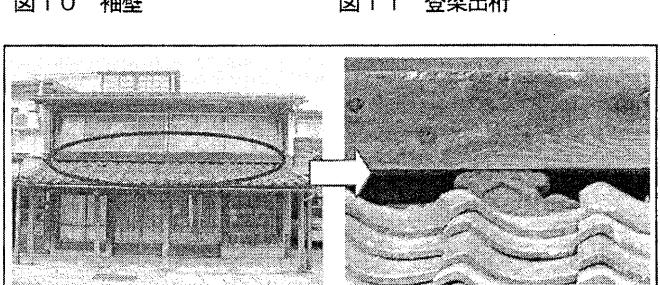


図 11 登梁出桁

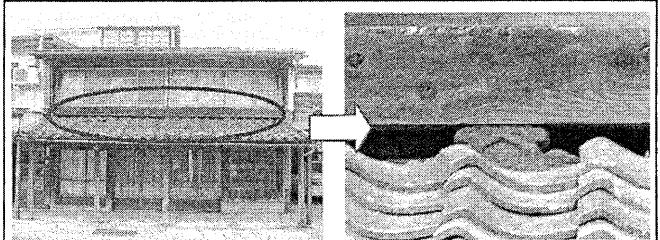


図 12 出窓の束

【補注】

(1)本研究では「第 2 次世界大戦以前に建てられた建造物」で、建築当初の形態を多く残すものとする。

(2)歴建率とは、対象範囲の全建造物に対する歴史的建造物の割合である。

(3)参考文献 2)における上越市税務課資料により抽出された高田地区内の「戦前建築」は 1391 棟、割合は 18.3% であり、最も高い地区は仲町 5 丁目で 36.7% となっている。調査範囲の違いや外観からでは判断できない敷地内部の建造物を多く含むことなどから本研究の 2 倍程度の棟数となっている。

(4)本研究では街道(表通り)と裏通りを主要街路とし、その他の街路を小路とする。主要街路歴建率は主要街路沿いの全建造物に対する歴史的建造物の割合とする。

(5)2 階高は、1 階高と比べて同程度(1.0)のものを中とし、半分(0.5)程度のものをつし、0.5 以上 1.0 未満のものを低、1.0 以上のものを高とする。

(6)新潟大学建築計画研究室による年代調査資料と本研究のヒアリングにより得られたデータである。

【引用・参考文献】

- 1)上越市創造行政研究所：歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書～歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりへ向けて～, 上越市, 2002.3
- 2) 上越市創造行政研究所：歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書～町家を活かしたまちづくりへ向けての提言～, 上越市, 2004.3
- 3) 東京大学工学部建築史研究室：越後高田の雁木, 新潟県上越市教育委員会, pp.1~31, 1982.3
- 4) 永木浩司・黒野弘靖：上越市高田における町屋の空間的特徴, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 第 49 号, pp.355~358, 2006.7
- 5) 池田哲朗：上越市高田における雁木通りの景観要素に関する研究, 新潟大学工学部建設学科建築学コース卒業論文, 2006.2
- 6) 佐藤憲明・岡崎篤行：新潟県岩船郡における歴史的建造物の残存状況と外観特性－下越地方の街道沿い対象として【その 1】－, 日本建築学会計画系論文集, No.610, pp.141~145, 2006.12
- 7) 山田貴一・岡崎篤行：城下町新発田における歴史的建造物の分布と建築的特徴, 日本建築学会北陸支部研究報告集, 第 48 号, pp.435~438, 2005.7
- 8) 新潟大学工学部建設学科建築学コース都市計画研究室+建築意匠・計画研究室・(株) 本間組(発行・編集)：平成 16 年度新潟大学・(株) 本間組共同研究報告書 みなとまち新潟の魅力を活かすための調査・研究「下町づくりの方策」, 2005.3